

# 女子教育と女子校



## Profile

みずた のりこ  
水田 宗子さん

学校法人 城西大学理事長、城西国際大学学長

＜略歴＞米国イエール大学大学院博士号取得後、南カリフォルニア大学比較文学部助教授・準教授等を経て、城西国際大学人文学部教授、城西大学学長となる。1996年から城西国際大学学長。2004年から学校法人城西大学理事長となる。専門は比較文学、女性学であり、「ヒロインからヒーローへ女性の自我と表現」(田畑書店)など現在までに多数の著書がある。

先日、鴨川市の旧曾呂尋常小学校の分教場跡を記念する石碑を大学から寄贈した。この分教場には、私の父(水田三喜男)が1年生から4年間通った。明治7年に曾呂村に小学校が出来たが、そこまでの通学できない僻地の子どもたちのために分教場が建てられたのである。父や、父の姉妹、兄弟八人とも、その分教場で勉強してから、父と兄や弟は曾呂尋常小学校から安房中学(安房高校)へ行き、姉や妹は安房女学校(安房南高校)へ進学した。

その安房南高校が、今年4月から安房高校と合併して姿を消すことになる。少子化で高校生人口が減少したためである。安房女学校は女子教育の名門校で、教員をはじめとする専門職業人への道を開く、女性にとっては限られた高等教育の場であった。校門を入ると木造の校舎の入り口があり、校庭は今もなつかしい気持ちを喚起する風情に満ちている。

父の姉と妹(半沢てい伯母と田村桃子叔母)は、祖母(水田もと)の自慢の娘だった。安房女学校を卒業してから、てい伯母は大地主の家に嫁ぎ、病弱だった夫を助けて、家事から農作物の管理、小作農家の家族の世話まで切り盛りして評判が高かった。桃子叔母は戦争で夫を亡くしてからは、農家の主として農業に精を出し、六人の子どもを育てた。それぞれに都会の核家族の主婦とは全く違った働く女性であった。

父の生まれ育った曾呂村から館山市までは通学できない距離だったから、父たちは安房中の寮に住み、伯母たちは安房女学校の寮に住んだ。農村の若い娘にとって女学校は憧れの場所で、そこで勉強すること自体が夢のようなことだったにちがいない。女学校がなかったら、伯母たちは娘時代の自由を味わうことが出来なかっただろう。娘たちを女学校に通わせた祖父や祖母は、曾呂の山奥に住んでいても、やはり明治の新しい風をいっぱい受け入れた人たちだったのだと思う。

私がアメリカの大学院へ留学したのは1961年(昭和36年)、「もう戦後ではない」「所得倍増」「いざなぎ景気」「ゴールデン・シックスティーズ(金色に輝く六〇年代)」といったキャッチフレーズで、敗戦から立ち直った日本が東京オリンピックを目前に、国際社会へ復帰しようとしていた頃だった。私が留学したいと両親に告げたのは、入学許可や奨学金がもらえることが決まってからだった。反対されても行く覚悟をしてのことだったが、父も母も反対らしい反対はしなかった。

当時のアメリカの大学は、ハーバード、イエール、プリンストンをはじめ、ほとんどの大学が女性を入学させなかった。女性は女子大へというのだった。大学院は別だったが、多くの大学が、男子校、女子校に分かれていたのである。私はアメリカへ来て、日本の大学ではもうなくなった女性を入れない大学があることに、やはり大きな違和感を感じた。

日本では戦前、男子と女子の教育は、別々の教育理念、目的と方法のもとで、教育制度が厳然と分かれていた。男女共学は戦後の教育の一番重要な改革で、国立大学へ女性が入学できるようになったのは、戦後である。しかし、国立とは異なり、それぞれに建学の精神の実践を目的とする私立学校が、男子校、女子校としての教育を続けるのは、自主と自由な教育のために当然認められなければならないだろう。アメリカでも、また戦後の日本でも、多くの女子大学、女子高等、中等、小学校教育が続いてきたのはそのためだ。

私が大学を卒業した1960年、女子の大学進学率はたった2.1%だった(男子は10.1%)。それが1997年には、短大を含めた女子の大学進学率は男子を上回った。日本では今、女子も男子と同じ教育を受ける権利があるし、女子も大学へ行き、卒業後は仕事を持つことが普通となった。女性も男性と同様に社会で働くことを、今は求められている。高齢化社会が進む中、社会は女性の力を必要としていることにやっと気がついてきたのである。

それでも職場や家庭において、女性差別や格差は相変わらず社会問題となり続けていて、女性にとっては住みやすい社会であるとは言えない。大学が格差をなくし、女性が生き生きと実力を発揮できる社会を作るために、きちんとした教育をしているだろうか、と言う問いは、女子教育に携わるものたちが常に問いかけてきたのだが、少子化という現実が、安房南高におけるような男女共学への移行を加速させている今こそ、大切な問いであると思う。女性の自己形成、社会人としての人材育成に、日本の教育はしっかりと向き合っているだろうか、女子校の教育はどのような成果と社会貢献を目指すのかなど、議論され尽くされていない課題はあまりに多いように思える。

社会は女子教育の成果を受け止めて、女性の働く場の環境を整えなければならないが、まず教育が、確かな女性人材を育て、差別意識を持たない男性を育てなければならないのは言うまでもない。小学校から女子大まで、一貫して女子校での教育を受け、一方、アメリカでは大学への女性の入学拒否も経験した私は、女性の教育をめぐるさまざまな課題と、これからも、まずは自分の仕事である人材育成の場で、しっかりと向き合っていきたいと思う。